

大阪市の中学校での歯科保健指導

大阪市学校歯科医会 副会長 岡本 卓士

中学生時代というのは、小児から大人への変化の時期であり、体は大人と一緒にいるぐらい成長してきますが、心理的には不安定で気持ちはいつも揺らいでいます。また、第2次成長期で自立した大人になる前に通らなければならない思春期を迎え、親や教師の縦の関係から、友達との横の関係が強くなってくると言われています。また、生活面においても、生活範囲の拡大や課外活動などへの参加にともなう生活時間が変化し、深夜までの受験勉強での夜食や間食などの食生活が著しく乱れてくる時期になります。

歯科においても、それまでの親の管理から離れて、親が「一度、お口の中を見せなさい」と言っても見せたがらなくなるように、自ら自律的管理に移行していきます。しかし、口腔内への関心は薄れていき、外面的な美しさを求めるような行動形式をとることが多くなるために、口腔内が不潔になり、歯肉炎の発症や口臭のある子どもも見られるような年代でもあります。

中学生の行動変容の面でも、規則などの管理的側面や一方的な知識の導入だけでは効果が少なく、科学的なまたは感情的な内容を背景にするのが必要になってきます。それで、指導がうまくいって、「自分の健康は自分で守るんだ」という意識が一度芽生えたら、その目標に向かって一所懸命努力

する時期でもあります。そのような自己意識を持つ子どもたちを1人でも多く生み出すために、大阪市では中学校において歯科保健の集団指導が行われるようになりました。

1 中学校「歯・口の健康教室」の開催

平成3年から中学1年生を対象にした歯みがき指導が始まり、今年でちょうど20年になります。最初は34校だったこの歯科保健指導も年々増加して、平成8年には50校を超えて、平成14年に小学6年生に「歯・口の健康教室」が始まったのに応じて、名称を中学校「歯・口の健康教室」に変更しました。実施校数も全中学校の半数の65～70校を数えるようになり、毎年実施する中学校も38校に上っています。

指導内容は、講堂や体育館に集合した中学1年生を対象にして、最初はホワイトボードなどを使って、むし歯の原因や唾液の働き、歯みがきの大切さといった基本的な話しを行います。その後、約15分間のビデオを上映して、歯周病の成り立ちや歯垢との関連の映像や解説をしています。そして、手鏡で見ながら歯みがきを行い、その後、スライドで食生活の改善や喫煙の弊害などの全身との関連の話しをするという内容です。

子どもたちは、前年の小学6年生の1学

期に受講した「歯・口の健康教室」の学習内容を復習して、歯周病の理解を深めて、健康の自己管理の大切さを認識させるという指導目標になっています。

この中学校「歯・口の健康教室」は大阪市の幼稚園から小学校において行われている生涯に通じた健康教育の最終仕上げとして重要視し、学校歯科医の出席率は67%で、参加された先生方は、指導前や指導後に講話をされているようです。中には歯ブラシやプリント資料を配布したり、編集したパワーポイントスライド上映による講話をされている校医もおられます。また、保健委員の発表のある学校もあり、生徒たちが司会進行を行うなど、学校側も協力体制をとるようになってきました。



2 中学校「歯・口の健康教室」を受講した生徒や養護教諭の反応

この保健指導に対して寄せられた意見や感想を参考のために記載します。

<生徒たちの反応や感想>

- ・歯ぐきはピラピラ動いていたのがとても印象に残っています。後の実験で自分の歯をみがかなかつたらどうなるのか分かっていい勉強になりました。
- ・歯垢にもいろいろな菌がいるのだな

あとと思いました。

- ・歯ぐきを突いて血が出たところが印象的であった。
- ・あんな歯になりたくないと思った。
- ・歯垢がどれだけたまるのか実験したのが一番印象的だった。実験台になった歯科医はすごい。
- ・自分では知っていると思っていたが、実際は知らないことが多かった。
- ・もつともつと歯を大切にしようと思った。



<養護教諭の先生方の反応や意見>

- ・やはり実施すると生徒たちに口の中の健康問題について考えさせることができ、その後の保健指導がやりやすい。
- ・外部講師だと新鮮なのか、ほとんどの生徒が聞いている。
- ・スライドが分かりやすく、生徒・教員に好評だったのでそういう視聴覚教材が必要だと思います。講師の方が上手に指導してくださったので、もし、自分が行うことができるだろうか不安です。
- ・子どもたちが鏡で遊んでしまい、鏡と歯ブラシの実習が困難な場合があり講師の先生には申し訳ないです。

・講師の先生が来られるということで時間をとってもらいやすいのですが「養教が・・・」となると学年での指導の時間が取ってもらいにくくなるのかな。

以上が「歯・口の健康教室」を開催した学校から寄せられた率直な意見です。中学校における歯科保健指導の効果の様子や実際問題的な難しさが現れていると思います。

3 中学校「歯・口の健康教室」の指導効果の評価

大阪市学校歯科医会では小学校から中学校で行われている4つの保健指導の有効性を判定することを1つの目的として、平成20年度に大阪市全校で6項目の健康診断結果の集計と分析を行いました。中学校の部門では130校中、75校の健康診断結果が返送されてきましたので、それを、平成17年から「歯・口の健康教室」を3年間完全実施した学校と、3年間実施しなかった学校に区分けして集計を行いました。①完全実施校と②未実施校は同じ26校でしたので、それぞれの健康診断の集計結果の内、4つの項目を比較検討することにより「歯・口の健康教室」の指導効果の有効性の判定を行いました。

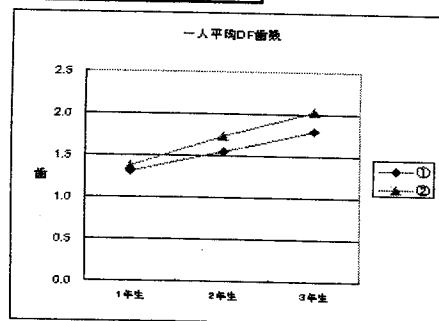
(1) 1人平均 DF 歯数

DF 歯数はむし歯を経験した歯のことですが、それを1人が何本有しているかです。3学年とも、完全実施校の方が少ない数値の良い結果が出ました。

①平成20年度「歯・口の健康教室」完全実施校

②平成20年度「歯・口の健康教室」未実施校

	1年生	2年生	3年生
①	1.30	1.54	1.80
②	1.38	1.73	2.03



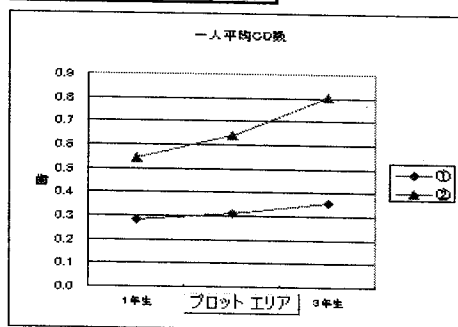
(2) 1人平均 CO 歯数

むし歯に成りかかっている歯を1人が何本有しているかです。3学年とも完全実施校の方が少ない数値の良い結果が出て、DF 歯数よりも差が開きました。

①平成20年度「歯・口の健康教室」完全実施校

②平成20年度「歯・口の健康教室」未実施校

	1年生	2年生	3年生
①	0.29	0.31	0.36
②	0.54	0.64	0.81



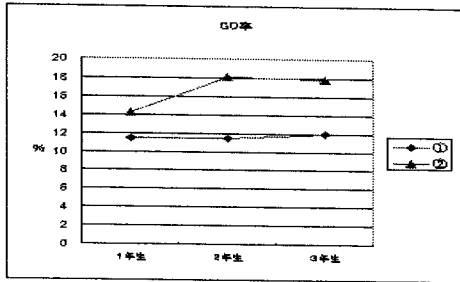
(3) GO 率

GO の歯肉炎を有している生徒の比率です。3学年とも完全実施校の方が少ない比率の良い結果が出ました。歯肉炎の改善を目的とした指導効果の有効性が証明されたと思われます。

①平成20年度「歯・口の健康教室」完全実施校

②平成20年度「歯・口の健康教室」未実施校

GO率	1年生	2年生	3年生
①	11.5	11.4	12.0
②	14.3	18.1	17.9

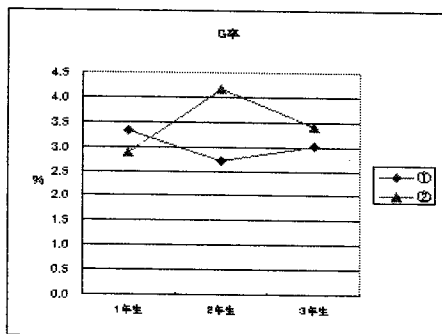


(4) G率

歯石の付いた歯肉炎を有する生徒の比率です。1年生は完全実施校の方が多く数値が出てしまいましたが、2年3年と数値が減少し指導の効果が出たと思われます。逆に未実施校は2年3年と数値が増加する悪い結果になりました。

- ①平成20年度「歯・口の健康教室」完全実施校
- ②平成20年度「歯・口の健康教室」未実施校

G率	1年生	2年生	3年生
①	3.3	2.7	3.0
②	2.9	4.2	3.4



4 中学校「歯・口の健康づくり研修会」の開催

このように、年々指導効果の成果を上げてきた「歯・口の健康教室」ですが、大阪府全体の市政改革に伴う経費削減の取り組みの中で、中学校「歯・口の健康教室」への歯科衛生士派遣費用についても平成22

年度から削減されることになりました。それまでは、大阪府歯科衛生士会・ライオン歯科衛生研究所・市教委の歯科衛生士が指導を担当してきましたが、歯科衛生士派遣費用が無くなったからと言って、翌年からの「歯・口の健康教室」をいきなり中止にはできません。そこで、平成22年度・23年度はライオン歯科衛生研究所・市教委の歯科衛生士が担当することにして、この2年間に平成24年度からの中学校における歯科保健指導体制作りをすることになりました。

このように、外部からの歯科衛生士派遣がなくなるということは、「歯・口の健康教室」を開催するには、必然的に学校歯科医と養護教諭のT・T方式による保健指導を行うということになってしまいます。

そこで、そのような事態になった場合には実際問題、どのような形式でこの保健指導をしていくのか。また、具体的な指導例として、どのような歯科資料や教材や器具を使用して実践していくのか。学校歯科の保健指導で子どもたちはいかなる反応を示し、子どもたちの心にまで訴える指導内容にまで高めていけるのかと言った項目で、中学校の養護教諭の先生方に研修してもらう「歯・口の健康づくり研修会」を平成23年8月4日と25日に2回開催しました。

この研修会の趣旨としましては、今までの「歯・口の健康教室」は悪く言えば派遣された歯科衛生士に任せきりの状態だったと思われます。今回の予算削減による歯科衛生士派遣中止をむしろ前向きに捉えて、学校歯科医と養護教諭が連携を取ってそれぞれの学校に応じた指導内容を実践していく良い機会になったのではないかと。そのた

めには、健康診断結果を集計分析して、そこから生徒たちが持つ問題点をみつけて、それを解決できるようなきめの細かい、それぞれの学校の現状に応じた「歯・口の健康教室」を1年生とは限定せずに、指導の必要な学年に開催して行こうというものでした。

5 「歯・口の健康づくり研修会」で養護教諭が提出した質問や意見

平成23年8月4日と25日に2回開催された研修会には、中学校の養護教諭が85名、平成23年度新任養護教諭が17名、オブザーバーで参加された学校歯科医が11名と総計113名の参加者でしたが、どちらの研修会も大変熱心に受講していただきました。それは、研修会中の質疑応答で多数の質問が寄せられて、それらのすべてを回答するのに、30分もかかったほどでしたが、中には、研修内容以外の日頃の学校歯科保健に対する生の意見や質問も提出されましたので、参考にその一部を紹介したいと思います。

(1) 歯科健康診断関連

- ① 治療勧告しても受診しない生徒が多くて困っています。学期末懇談時に担任から直接保護者に伝えてもらって、やっと治療に至ることもありますが、そのまま、放置している生徒もいます。治療をお願いするのが難しいと感じることもあります。
- ② 学校がCOとして勧告してもほとんどがCとして治療されて返ってきます。今の歯科治療では、ほとんど観察がされていないように感じます。今後

の動静を知りたいです。

- ③ 歯科検診をしていると、処置歯もむし歯も無いのにGで歯石が付いている子どもが多いように感じます。歯質、唾液だけの問題ですか。他の理由もあるのでしょうか。
- ④ 大阪市での1クラスの平均検診時間を設定していただけないでしょうか。

(2) 学校歯科保健指導関連

- ① 歯と口の健康教室は一斉の指導になります。200名を超える生徒を体育館に入れても指導になっていません。小学校のように学級単位での指導はできないのでしょうか。
- ② 歯垢や歯肉炎を認められる生徒が増加しており、染め出し液を使いブラッシング指導を行いました。生徒と向かい合って個別指導の上手な指導方法を教えてください。
- ③ 学校保健と母子保健の連携で何か取り組まれていることがあれば教えてください。

(3) 歯科知識全般

- ① 外傷に関すること
 - ・破折や脱臼した歯の治療について教えてください。破折した歯は付く時と付かない時があるようですが、脱臼した時の神経の修復はできますか。
 - ・歯のけがでの学校での対応と病院での処置について詳しく教えてください
 - ・欠けたり抜けたりした歯の保存液として、他の用途にも生理食塩水が便利でしたが、処方箋がないと手に入らないということです。一括購入の

予定はないですか。

- ② 食後すぐの脱灰期の歯みがきは返って歯を痛めるというのは本当ですか。
- ③ 口呼吸の子ども、食物を飲み込めずに口の中にためている子ども、噛む力が弱く肉を噛みちぎれない子どもへの指導方法を教えてください。

当日、提出された質問全部を紹介は出来なかったのですが、ここに記載したものは、現在の中学校における学校歯科保健の問題点を浮き彫りにした大変貴重なご意見ばかりです。研修会においては、知る限りの範囲で回答はいたしました。大阪市学校歯科医会としましては、これらの問題点を解決できるようにしたいと思っています。

6 歯口の健康づくり研修会におけるアンケート調査

研修会を受講した113名を対象に担当校園における学校歯科保健の取組みの様子のアンケート調査を行いました。その集計結果を記載しますので参考になさってください。

- ① 歯科健康診断後のC0、G0の子に対して個別の指導を実施している
はい14.8% いいえ84.1%
- ② 学校保健委員会や児童・生徒委員会などで歯と口の健康を取り上げている
はい43.2% いいえ54.5%
- ③ 歯科保健活動に関して学校(園)は協力的である
はい71.6% いいえ18.2%
- ④ 歯科保健活動に関して、学校歯科医(園医)は協力的である

はい78.4% いいえ11.4%

- ⑤ 歯と口に関して熱心な保護者が多い
はい20.5% いいえ69.3%

7 まとめ

90%以上の実施率を誇る小学校の3つの保健指導に比べて、半分の実施率の中学校「歯・口の健康教室」ではありますが、他府県や他の指定都市と情報交換をしましても、中学生を対象にしたこのような組織管理された保健指導を、毎年9000名を超える生徒たちが受講し、それを20年も継続して指導効果を上げている団体は他に見当たりません。

しかし、この歯科保健事業も大阪市の教育界にまでも及ぶ予算削減により、今や存亡の危機にあると言わざるを得ないと思われれます。今後、大阪市も政治状況の激変により、どのような学校歯科保健指導形態になるかは想像もつきませんが、80周年を迎えた大阪市学校歯科医会としましては、これらの障害を乗り越え、臨機応変に対応し、さらに充実した中学校での歯科保健活動ができるように務めてまいりたいと思います。

そのためには、上記のアンケート調査結果で出された「学校は71% 学校歯科医は78%が歯科保健活動に協力的である」ということが救いであり、励みになることは言うまでもありません。